Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

松平家・黒田家旧蔵資料受贈記念速報展「明石藩の世界」（時評・書評・展示評）

河野，未央

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,5:151-155

(Issue Date)
2013-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005410

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005410

Current Topics & Reviews

時評・書評・展示評

松平家・黒田家旧蔵資料受贈記念速報展「明石藩の世界」

河野　未央

はじめに

松平家・黒田家旧蔵資料受贈記念速報展「明石藩の世界」（以下、速報展）は、明石市立文化博物館にて平成二四年（二〇一二）九月八日～二三日に開催された（主催：明石市・明石市立文化博物館・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター・日本陶磁協会明石後援会、同時開催：「江戸時代のやきもの」展）。

従来、明石藩に関する歴史資料はあまり多く知られてはいなかった。そうしたなかで旧明石藩主である松平家と、その家老であった黒田家に伝来するおよそ一七〇〇点の資料が平成二三年に明石市に寄贈されたことを機に、調査研究が進められたことは、今後明石藩史研究の進展が期待できるたいへん意義ある出来事であった。神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（以下、センター）は、同二三年より明石市からの受託事業として明石藩黒田家関連資料群の目録作成業務を実施してきたが、今回の速報展は、目録作成にともなって進められたセンターの調査成果をいちはやく市民に伝えるための、まさしく「速報」として位置づくものである。以下、速報展を中心に展示内容を紹介していきたい。

松平家・黒田家旧蔵資料受贈
記念速報展
「明石藩の世界」

会期　2012年9月8日～23日
会場　明石市立文化博物館
主催　明石市・明石市立文化博物館・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター・日本陶磁協会明石後援会

一　展示レイアウト

主催者挨拶文等によれば、基本的に速報展で展示されたの

展示会場のようす

は資料群の一部、さらに「比較的保存状態の良いもの」という限定があったようだ。そうした制限がありながらも、筆者は、展示全体をながめたとき、寄贈された松平家・黒田家両資料群について、それぞれの「群」の全容と性格を伝えることに成功しているとの印象を受けた。こうした資料「群」を意識させる手法は、「アーカイブズ展示」の手法としても興味深いものである。

会場内のレイアウトは、移動式の展示ケースが壁面に一二、中央に三台と非常にシンプルに、おおむね以下のとおりに構成される。（Ⅰ～Ⅴの数字は筆者が便宜上記したもの）

Ⅰ　松平家旧蔵文書①②
Ⅱ　黒田家旧蔵文書①②③
Ⅲ　松平家旧蔵資料
Ⅳ　黒田家旧蔵資料（武具）
Ⅴ　黒田家旧蔵資料（生活道具など）

Ⅰ・Ⅱでは、「松平家年譜」（松平家資料、以下「松」とのみ記す）など松平「家」の基礎資料のほか、「明石藩江戸藩邸日記」（松）、「御留守居日記」（黒田家資料、以下「黒」とのみ記す）、「者頭控」（黒）など江戸時代後期～幕末期を中心とした藩政資料を紹介している。Ⅲ～Ⅴでは、美術工芸品等のモノ資料が中心で、挟箱（松）・陣羽織（松）・陣幕（黒）・火事頭巾（黒）などのほか、太刀・脇差・鉄炮等の武具（黒）や貝あわせ・矢立・簪・虫籠・煙管等の日用品類（黒）がある。

注目したいのは、状態の悪さゆえに今回は展示できていない絵画類についても、パネルを作成し、紹介している点である。「松平家資料・黒田家資料とはどういったもので構成されているのか」ということをまず伝えたいという担当者の意

図は、出陳されていない絵画類への言及からも強く感じられた。

二　解説資料について

壁面に設置された展示ケースには、概ね一台ごとに一～二枚の解説パネルが掲げられ、展示ケース内の資料の概要等を説明している。展示ケース内のキャプションは基本的には展示資料名、資料群名（松平家資料・黒田家資料）、年代等の（おそらく意図的に）必要最小限の情報にとどめてある。ケース内に配置された展示資料数がやや多いことからの配慮であろうが、モノと情報とのバランスは非常によく考えられている。

なお、「群」としての情報を伝える手段が、パネルデザインの中に一種の「遊び心」のような感覚で盛り込まれている点も見逃せない。松平家資料に関する説明パネルの背景には松平家の家紋が、黒田家資料に関する説明パネルの背景には、黒田家の家紋がさりげなくデザインされていた。また、資料に付されているキャプションも松平家資料に関しては緑、黒田家資料に関しては赤のラインが引かれており、両者の「群」としての区別は視覚的にも強調されている。もっともこうした意図がどこまで観覧者に伝わっているのか、ということは少し気にかかった点である。

なお、会場では「『明石藩の世界』展示資料解説」が配布されている（以下、配布資料）。資料キャプションはシンプルであったが、こうした展示キャプションで控えられた情報は、配布資料にあますところなく記されており、この間積み上げられた「研究成果」は、まさにこの資料に集約されていると言える。その充実ぶりは、この配布資料の内容に展示資料写真が掲載され、参考文献等が加わるなど本の体裁を整えればすぐに『図録』として刊行できると思わせるほどだ。

これほどバラエティに富んだ内容をもつ資料「群」について、おそらくはあまり長いとは言えない研究期間でもって、ここまで内容を充実させた展示担当者の力量には心底感服せざるをえない。

三　関連イベントについて

速報展の開催期間中は、配布資料作成に関わった前田結城氏の講演「黒田家文書「日記」からみえる幕末の明石藩」が開催された（九月一五日／於文化博物館二階大会議室）。筆者

は残念ながら講演会に参加できなかったが、会場は満員で盛況だった旨を伝え聞いている。

また、木村修二氏は、開期中可能な限り会場へ足を運び、随時展示解説を実施したという。筆者が観覧した際も木村氏に解説いただいた。

観覧者に展示担当者の「顔」が見えること、対話的であることの重要性は、博物館展示の実践においてもすでに指摘があり、ギャラリートークやガイドツアーさらには展示を活用したワークショップなどの実践は、様々な博物館で意欲的に取り組まれている[1]。センターの地域連携事業においても、市民とのコミュニケーションの重要性は、展示に限らずあらゆる実践の場において重視する姿勢が貫かれており、今回の展示解説もまた同様のスタンスにたったものであろう。しかしながら、博物館では展示担当者（学芸員）が一日展示会場にはりつき、観覧者へ様々に対応することは、じつはとても「贅沢」なことであり[2]、今回の展示の最大のポイントであったと思う。

おわりに

速報展に関しては、展示の技術的な側面（出陳された資料の配置バランス等）や、内容＝「研究成果」のクオリティは非常に高かった。

もっとも展示と配布資料のみを通じてその「研究成果」を観覧者が理解するためには、やや高度な歴史に対する知識と、解説パネルや配布資料にくまなく目を通す努力が要求されることも事実である。結果として「わかる人だけ（面白さが）わかる」展示内容となってしまっている点は、気になった。このようになると、いったい「誰」に見せるための展示企画だったのかという、甚だ根本的な疑問を抱かざるをえないからである。「誰」に見せるための展示だったのか。やはり第一義的には「（すぐには面白さが）わからない人」も含めた「明石市民」ではないのか[3]。

そもそも、日本の歴史系博物館は、「敷居が高い」「楽しめない（つまらない）」などといった厳しい批判にさらされ続けている[4]。こうした現状をふまえつつ、センターはこれまで兵庫県内の各地（神戸市灘区篠原地区、小野市、尼崎市富松地区など）において、様々な館・施設、団体と協力し、市民とのコミュニケーショナルな展示実践の経験を積み上げてきた。そうでありながら、なぜ今回はこうした「わかる人だけわか

る」という「見せ方」にとどまってしまったのであろうか。

筆者もかつてセンター研究員であったので、「内情」はそれとなく想像がつく。センターの展示担当者は、当該展示以外にも多くの事業や仕事を抱えながら、限られた時間や労働力をやりくりし、「汗」と「努力」で展示を作り上げ、やっとの思いで開催にこぎつけたのだろう。うがった見方をすれば、明石市との事業が単年度契約であったり、明石市立文化博物館が指定管理者による運営であったりと、様々な環境・条件により、時間的制約がどうしても生じてしまったのかもしれない。

理想論であることはよくよく理解しているが、やはり中長期的な計画・展望に基づいた、コンセプトの練り上げやコンテンツの作成、関連イベントを含めた普及活動を実施していくべきだろう。

平成二五年度もまた継続して「企画展　館収蔵品展『明石藩の世界Ⅰ――文書と絵画――』」（開期：二〇一三年九月二一日～一〇月二〇日）が開催されると聞く。筆者としては速報展での「振り返り」をもとに、今年度の展示において新しい切り口での「見せ方[5]」が加わったり、先述したような展示室での「対話」が充実したりすることを、ぜひとも期待したい。

註

（1）たとえば、橋本雄「歴史展示、「伝えること」の難しさ」（『歴史学研究』八五四号、二〇〇九）など。

（2）展示室の学芸員の常駐は、博物館が意識的かつ「組織的に」取り組まなければ実現は難しいだろう。実践例は、たとえば浜口哲一『放課後博物館へようこそ――地域と市民を結ぶ博物館』（地人書館、二〇〇〇）に紹介されている。

（3）たとえば子どもが対象に入っているかどうかで、おそらく「見せ方」は大きく変わるであろう。

（4）たとえば、国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か　歴博フォーラム歴史系博物館の現在（いま）・未来（これから）』（二〇〇三）、同『歴史展示のメッセージ　歴博国際シンポジウム「歴史展示を考える――民族・戦争・教育」』（二〇〇四）や、『歴史学研究』八五四号・八五五号（二〇〇九）における「特集　博物館展示と歴史学――展示叙述の可能性」（1）（2）などにおいて挙げられた課題の数々は、現在もなお歴史系博物館が直面する問題群である。

（5）見せたい観覧者が「誰」かを具体的に想定することで、たとえばキャプションに記す資料タイトルのつけ方や解説も変わってくる（安村敏信『美術館商売　美術なんて…と思う前に』勉誠出版、二〇〇四、神戸市立博物館図録『南蛮美術企画展　若芝と鶴亭――黄檗宗の画家たち――』二〇一一等参照）。